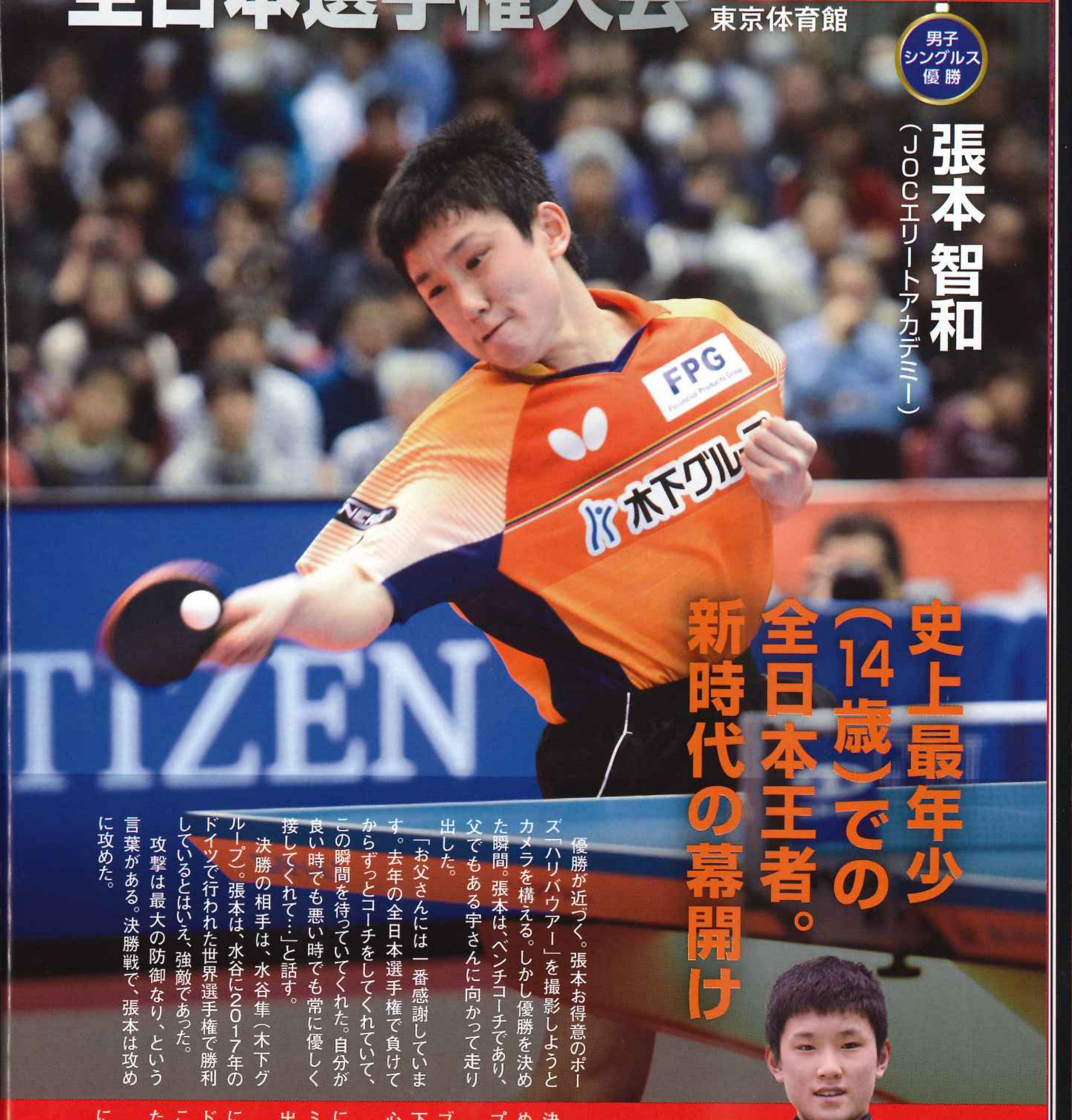
天皇杯・皇后杯 平成29年度 全日本選手権大会

1・15〜21日 東京体育館



男子シングルス優勝

張本智和（JOCエリートアカデミー）

史上最年少（14歳）での全日本王者。新時代の幕開け

優勝が近づく。張本お得意のポーズ「ハリバウアー」を撮影しようとカメラを構える。しかし優勝を決めた瞬間。張本は、ベンチコーチであり、父でもある宇さんに向かって走り出した。

「お父さんには一番感謝しています。去年の全日本選手権で負けてからずっとコーチをしてくれていて、この瞬間を待っていてくれた。自分が良い時でも悪い時でも常に優しく接してくれて…」と話す。

決勝の相手は、水谷隼（木下グループ）。張本は、水谷に2017年のドイツで行われた世界選手権で勝利しているとはいえ、強敵であった。

攻撃は最大の防御なり、という言葉がある。決勝戦で、張本は攻めに攻めた。

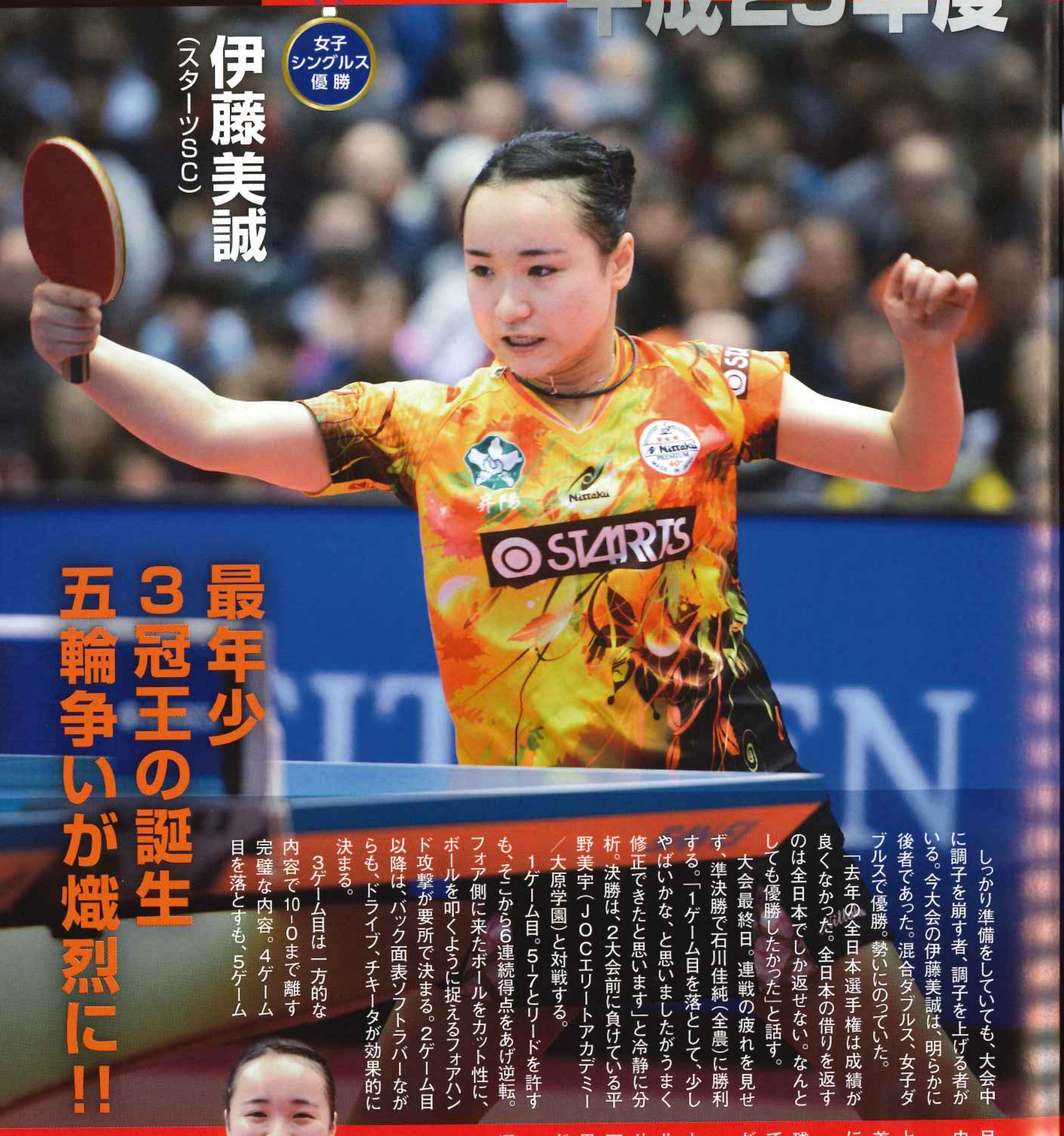
「準決勝までは消極的なプレー。決勝戦では失うものがないので、攻めました。卓球をしてきて1、2番のプレーができた」と張本は振り返る。

プレーはできるだけ前陣でドライブやカウンター。もしそこで負けて下がっても、五分五分になるように心がけた、と話した張本。

張本の両ハンドの打球点は驚異的に早く、特にバックハンドはドライブ、ミート打ちなど様々な球質を繰り出す。新しい卓球のスタイルであった。

「今回優勝したことで2020年に向けて、もっともっと成長のスピードが早くなると思う。2年後またここに戻ってきて、金メダルを2つ取りたい」と宣言。

今の張本は、東京五輪の金メダルにしか興味がない。



女子シングルス優勝

伊藤美誠（スターツSC）

最年少3冠王の誕生 五輪争いが熾烈に!!

しっかり準備をしていても、大会中に調子を崩す者、調子を上げる者がいる。今大会の伊藤美誠は、明らかに後者であった。混合ダブルス、女子ダブルスで優勝。勢いにのっていた。

「去年の全日本選手権は成績が良くなかった。全日本の借りを返すのは全日本でしか返せない。なんとしても優勝したかった」と話す。

大会最終日。連戦の疲れを見せず、準決勝で石川佳純（全農）に勝利する。「1ゲーム目を落として、少しやばいかな、と思いましたがうまく修正できたと思います」と冷静に分析。決勝は、2大会前に負けている平野美宇（JOCエリートアカデミー／大原学園）と対戦する。

1ゲーム目。5-7とリードを許すも、そこから6連続得点をあげ逆転。フォア側に来たボールをカット性に、ボールを叩くように捉えるフォアハンド攻撃が要所で決まる。2ゲーム目以降は、バック面表ソフトラバーながらも、ドライブ、チキータが効果的に決まる。

3ゲーム目は一方的な内容で10-0まで離す完璧な内容。4ゲーム目を落とすも、5ゲーム目は再び圧巻の内容をみせ勝利。史上最年少での3冠を達成した。

これまで一般では「全日本選手権」というタイトルに無縁であった伊藤美誠。だが今大会で3冠を達成。一気に自信を高めた。

2017年。石川佳純（全農）を残し、長らく女子卓球界をけん引してきた、福原愛が結婚、平野早矢香が引退を表明し、一線を退いた。

伊藤美誠、平野美宇、早田ひな、という3人の同年代が台頭。ライバルが自分自身を成長させる、と思わせる1年で、3選手は一気に成長。石川に加えて、3選手はこれから卓球界にどんなドラマを見せてくれるのだろうか。

壮大なストーリーが、この全日本選手権から始まった。

男女複・混合複 Doubles

平成29年度 全日本選手権大会 2018

Men's

水谷隼(左)・**大島祐哉**(木下グループ)
フットワークを活かし、ラリー戦に強さをみせた

上田仁(左)**吉田雅己**(協和発酵キリン)
台上処理が上手く、細かい技術が抜群によかった

藤村友也(左)・**吉村和弘**(日鉄住金物流・愛工大)
どこからでも点数を取れる両ハンド攻撃をみせた

張本智和・宇田幸矢(左)
(JOCエリートアカデミー・JOCエリートアカデミー/大原学園)
バックハンドでの展開が素晴らしかった

Women's

伊藤美誠(右)・**早田ひな**(スターツSC・日本生命)
世界でも活躍するペアは、攻めてよし、守って良しのコンビネーションをみせた

梅村優香(左)・**塩見真希**(四天王寺高)
丁寧なプレーでミスが少なく、チャンスを確実に得点に結びつけた

田代早紀(右)・**前田美優**(日本生命)
ラリー戦に強く、点数が離れても粘り強いプレーをみせた

佐藤瞳(右)・**橋本帆乃香**(ミキハウス)
カット主戦ながら積極的な攻撃をみせた

Mixed

森薗政崇(左)・**伊藤美誠**(明大・スターツSC)
両者とも打点が高く、なおかつコース取りが厳しい。
相手に主導権を握らせなかった。初優勝

軽部隆介(右)・**松本優希**(シチズン時計・サンリツ)
コンビネーションが良く、ミスが少ない。試合運びもうまかった

吉村真晴(右)・**石川佳純**(名古屋ダイハツ・全農)
優勝こそ逃すも、ここぞ、で見せるプレーはさすが世界1であった

大島祐哉(右)・**早田ひな**(木下グループ・日本生命)
ダイナミックなラリー戦に強さをみせた

●順位はランキングを示します。